パスカルの≪アポロジー≫のプラン復元に関して（V）

竹　下　春　日

Sur le plan de l'≪Apologie≫de Pascal (V)

本論文の主旨は，われわれの所謂 Non classé（未分類断章群）の諸タイトルを推論確定することにある。「パスカルの死後残された既分類の各リヤスのタイトルは，1658年末以前のものであるが，これらが彼の死当時（1662年）にも保存されていたという事実そのものが，1661—1662年の≪アポロジー≫のプランを構成するものであることを示している」——かかる推定は，多くの諸家の見解に意識的ないし無意識的前提として，広く見られるところであり，かつ単純明快であるが，しかし客観的事実はかかる単純な推論を許さないのである。その理由次はのごとくである。(一)既分類（Classé）のタイトル中宗教の証拠を示すもの（Lafuma のいわゆる 18°～26°）があるが，Non classé 中にも同様のものが二個(La. 38—Br. 290, La. 459—Br. 289) 存する。この三者はパスカルが宗教の証拠として考えついたもので，名称の上で共通のものもあるが，異るものもあり，数的にも相互に一致してはいない。もし Non classé 中の一つが，パスカルの真に意図する≪宗教の証拠≫ Preuves de la religion であるとすれば，リヤス中の諸タイトル（上掲の 18°～26°）は，少くとも部分的に改変されるはずであったことになるのである。(二)次にこれら三者のうちの一番新しいものを決定しえたとしても，これは直ちにわれわれの求めるものとは言い難い。なぜならわれわれの研究目標は，Non classé 中の最後の断章が書かれた時点における≪アポロジー≫のプランを形成する章名，言い換ればパスカル生前における最も新しいプランのタイトルを，知るにあるからである。つまり，上記の三者が書き残された以後彼が死ぬまでの間に，第四番目の≪宗

教の証拠≫にかんするものが書かれ，これが紛失したことも，ありえないことではないからである（論理的には第五，第六……番目のものもありうる）。以上二つの理由によって，われわれは Classé の諸タイトルをもって，直ちに Non lassé のタイトル（われわれの研究意図に合致した）と見做すことは許されないのである。

I　第二の証明

前回(Ⅳ)の証明を第一の証明，今回の初めのものを第二の証明と呼び，以下これについて述べることにする。Classé にぞくする fr. La.430—Br.570 には，次のごとき叙述が見られる——≪「基礎」の章に，「表徴」の章にある表徴の理由に関するものを付け加えなければならない。イエス・キリストがその最初の来臨を預言された理由。その来臨の仕方が曖昧に預言された理由。≫ところでこの断章中に見られる≪「表徴」の章にある表徴の理由≫は，Classé の≪表徴としての律法≫に所属する La.489—Br.758 にこれを見出すことができる——≪神は，メシアを善人には認めさせ，悪人には認めさせまいとして，彼のことを次のように預言させられたのである。もしメシアの来臨の仕方が明らかに預言されていたら，悪人にとっても漠然としたものがなくなっていたであろう。／もしその来臨の時期が漠然と預言されていたら，善人にとっても漠然としたものがあったであろう。なぜなら，彼らは〔その心の善良さ〕だけでは，たとえば閉じた「メム」が六百年を意味するというようなことは了解することができなかったであろうから。そこで，時期は明らかに預言され，仕方は表徴によって預言されたのである。／このようにして，悪人は約束された幸福を物質的に解して，その時期が明らかに預言されていたにもかかわらず迷ったが，善人は決して迷わなかった。／なぜなら，約束された幸福の解釈は，自分の愛するものを「幸福」と呼ぶ心のいかんにかかっているが，約束された時期の解釈は，心のいかんにかかっていないからである。ゆえに，時期の明白な預言と幸福の漠然とした預言とは，ただ悪人を失望させるにすぎない。≫この断章 La.489—Br.758 中の≪神は，メシアを善人には認めさせ，悪人には認めさせまいとして，彼のことを次のように預言させられたのである。≫の具体例を，パスカル

はNon classéのLa.663—Br.761のうちに書き残している——≪ユダヤ人は，彼のメシアであることを認めまいとして，彼を殺したことにより，彼にメシアの決定的な証拠を与えた。……そして，彼を殺し，彼を拒みつづけて，預言を成就させた。≫ところでNon classé中のLa.642—Br.783は，次のごとく述べている——≪……そのときイエス・キリストは来臨して人々に言われる，彼らは彼ら自身のほかに敵を持たない，彼らを神から引き離しているのは，彼らの悪念である，自分はそれらの悪念をこぼち，自分の恵みを彼らに与えるために来た，それは彼らのすべてを一つの聖なる教会とするためである，自分はその教会に異教徒とユダヤ人とを引き入れるために来た，異教徒の偶像とユダヤ人の迷信とをこぼつために来た，と。これらに対して，すべての人は反抗する，それはたんに邪欲の自然な反抗によってではない。なかでも，地の王たちは，すでに預言されているように，生まれたばかりのこの宗教を滅ぼそうとして団結する（預言，〈なにゆえ，もろもろの国びとは騒ぎたち……地の王たちは……キリストにさからい〉）。／地上のすべての偉大な者，学者，知者，王たちが互いに団結する。学者は記録し，知者は罪に定め，王者は死に処する。そのようなあらゆる反抗にもかかわらず，これらの平凡で無力な人々は，すべての権力に抵抗し，王，学者，知者たちを屈服させ，偶像崇拝を全地から一掃する。そして，これらはみな，それを預言した力によってなされるのである。≫

この断章（La. 642）を前出の二断章La.489とLa.663とに比較すれば，われわれは前者が後二者を部分的に詳述して補足したものであることが分る。すなわち，La.642中の≪自分はそれらの悪念をこぼち，自分の恵みを彼らに与えるために来た，それは彼らのすべてを一つの聖なる教会とするためである。云々≫は，La.489中の≪約束された幸福≫の内容を具体的に述べたものであり，また同じくLa.642中の≪なかでも，地の王たちは≫以下の文章は，聖書中の出来事を引いて，La.663の内容を詳しく説明したものにすぎない。以上を要約再言すれば，La.430（Classé）はLa.489（Classé）によって補足され，次にこのLa.489はLa.663（Non classé）によって部分を具体化され，さらにLa.489およびLa.663はLa.642（Non classé）によって部分的にあるいは全面的に詳細化されているのである。したがって以上の四断章はすべて，内

容上必然的関連を持ちつつ一セットを構成しているのである。

さてかように一貫した脈絡のうちに位置を占めあう断章群のうち，La.642—Br.783 は，Lafuma の考証によれば，1661—1662年に執筆されたものである[1]。それゆえこの断章と内容上相補的関係にある三個の断章はすべて，1661—1662年代における≪アポロジー≫のプランにおいて生かされていたものであると言うことができる。そしてこの三断章中の一つ La.430—Br.570 には，≪「基礎」の章≫le chapitre des *Fondements* および≪「表徴」の章≫ le chapitre des *Figuratifs* が存する。これらは，それぞれ liasse の諸タイトルたる≪宗教の基礎と反対論への回答≫Fondements de la religion et réponse aux objections と≪表徴としての律法≫Loi figurative とを指している以上，liasses の諸タイトルは1661—1662年における≪アポロジー≫のプランを反映しているものと，われわれは結論しうるのである。

かようにわれわれは所期の成果を得たのであるが，しかしこの成果にもかかわらず，なお本論文の最初に述べられた二つの問題は，これを解決するに到らないのである。すなわち，≪宗教の証拠≫についての三つの資料のうち，どれが一番最後のものであるか，およびこれにかんする第四番目以下の構想が果してありえないか，という問題は依然として残るのである。われわれはこれに対する回答を得るべく，別の機会において努力するであろう。それゆえ茲ではこれらの問題をバイパスし，第三の証明に移ることにし度い。

II　第三の証明

パスカルが名文家であることは，文学史上著名の事実にぞくするが，これと関連して彼が文章の推敲に留意したであろうことは，その草稿を一見しただけで明らかである。文章の訂正・改善は不適切な表現を「抹消する」rayer という形ちで頻出している。断章の部分ないし全体を抹消するというこの傾向は，じつに彼の死去に近い時期まで継続していたのであって，次の表はこの事実および抹消（部分または全体）の見られる断章数を示したものである。

1. Classé…… 165
2. Non classé…… 115

3. 1661—1662年の断章 (Non classé)……3

≪アポロジー≫のために執筆されたとおもわれる全断章736個のうち，一部または全体が rayer された断章は全部(Classé+Non classé)で280個に達しており，これは全断章数の⅓以上を占めるものである（しかもこれは控え目の計算によるものである。）[2] かようにパスカルの文章に対する配慮は，数字の上でも歴然たるものがあるが，肉筆原稿の写真版はさらにより一層このことを物語っているのである。

扨て上表中の3の示す通り，パスカルは彼の死に近い時期（1661—1662年）にあっても，推敲を怠ってはいない。ところで，Classé のタイトル表のうち，rayer されたものはただ一個であるという事実（Ⅲの Lafuma の叙述参照）に，われわれは至大の注目を払うべきである。なぜなら諸タイトルそのものは，≪アポロジー≫のプラン中重要なる性格を持つものであり，かつこれらの語句は比較的短いものばかりであって，抹消は手数としては極めて簡単だからである（これは一本の横線を引くことで十分である)。最長のタイトルといえども≪Fondements de la religion et réponse aux objections≫, ≪Transition de la connaissance de l'homme à Dieu≫ というに過ぎない（これらは liasse に直接記されたものであるが，liasses とは別に筆写された二個のタイトル表には，それぞれ Fondement, Transition と略記されている)。それにもかかわらず，これが行われていないのは，1661—1662年にあっても，rayer されていないこれらのタイトルがすべて当時のプランに相応しいものとして，パスカル自身によって認められていたからである。かくしてわれわれは，Classé の諸タイトルはそのまま Non classé のタイトルであることを，証明しえたのである。

以上の推論に対して，当然次のごとき疑問が可能である。すなわち，本論文の最初の部分において述べられた≪宗教の証拠≫にかんする二個の断章もまた，抹消されていないのは何故か。リヤス中の同じく≪宗教の証拠≫に関連する諸タイトル(Lafuma のいわゆる18°～26°)を含めて三個のもののうち，一つがパスカルの最終意図(生前における)を示すものであるならば，他の二つは抹消されて然るべきではあるまいか。かかる疑問を解くことは，われわれにとってさほど難事ではない。われわれは漸てこの解決を，既出の二個の問題(Ⅰの最後に

おいて述べられたもの）に対する解答とともに，行いうる機会を持つであろう。

Ⅲ　Liasse の順序と Lafuma の所説

≪アポロジー≫の構想を示すとみられる liasses の順序がわれわれにとって重要なる意義を持つものであることは，言うまでも無い。したがってこの順序を決めた者が，パスカル自身であるか，あるいはポール・ロワイヤル版編集委員会のメンバーの一人または数人（例えば Arnauld, Nicole）であるかは，決定すべき重要事項である。旧著において Arnauld-Nicole 説を主張した Lafuma は，後になってこれを翻し，順序はパスカル自身によるものだとしている[3]。彼は *Histoire des Pensées de Pascal* なる著書において，次のごとく述べている。「われわれは今や種々の理由から，この並べられた一連のもの〔リヤスの順序〕がパスカル自身によって設けられた（établie par Pascal lui-même）のだ，という考えに傾くのである。パスカルによって設けられたからこそ，Etienne Périer はポール・ロワイヤル版の序文で，次のように書いているわけだ――≪そのうえ，公刊されるこの僅少な集録にあって，材料の並べ方で，その順序や脈絡（son ordre et sa suite）が守られなかったとしても，驚くには及ばないのである≫と。したがってパスカル歿後の文書には，一連の順序と脈絡とがあったわけである。少くとも，宗教にかんする著述のために執筆された文書の一部は，そうである。次のこともまた同様に，否認し難くおもわれるのだ。つまり，『第一写本』に（二度も繰り返えして）[4] 転写された題目の一覧表なるものが，一個の自筆文書（un document autographe）に基づいて筆写されたということ，このことは異論の余地が無いようにおもわれるのだ。当のコピストも，この原稿を写しながら，手を加えることなぞ考えてはいないのである。だから『写本』は，一つの章に二個のタイトルを附している――『民衆の健全なる意見』 *Opinions du peuple saines* と『現象の理由』 *Raisons des effets*。ところでこのうち最初のタイトルは，横線で消されている。したがってコピストは，現に眼の前にしていた文字を，正確に転写写しているわけだ。しかも『人間を知ることから神への移行』という章と，『他宗教の虚偽』という章との中間に記上された『本性は堕落している』 *La nature est corro-*

mpue なる一章は，『写本』中には姿を現わしていないのである[5]。それというのも，パスカルが分類を決心した時点にあっては，疑いも無く彼は，このリヤスに予定された諸紙葉を，まだ綴じ始めてはいなかったからである。実際，こうしたタイトルを持った断章二個を認めうるのだ。つまり，(La.60)——≪*La nature est corrompue,*……≫と (La.132.)——≪*Nature corrompue,* ……≫。それから，もう一個別の断章もこのタイトルを暗示しているのだ。つまり，(La.42)——≪*Ordre.* Après la≪*corruption*≫dire : ……≫が，そうである。これらの断章は，同じテーマを発展させた——(La.130—La.145) のように——別の諸断章と一緒に，未分類の紙葉におのずと見られるのである」[6]

以上のごとく Lafuma の言わんとするところは，『第一写本』は既分類紙葉にかんするかぎり，肉筆原稿の状態を忠実に伝えるものであり，かつ Périer の叙述に徴して，〈son ordre et sa suite〉がこの肉筆原稿に存した事実が察知される以上，『第一写本』のタイトル表はパスカルの手に成る〈un document autographe〉(紛失したと想像される)に基づくものであるということ，したがって『第一写本』に見られる順序は，まさにパスカル自身によるものだということである。しかし，何故 Périer は他方において，〈On les〔écrits〕trouva tous ensemble enfilés en diverses liasses, mais sans aucun ordre et sans aucune suite,……〉[7] と書かざるを得なかったのであろうか。この意味深重なる疑問は，漸てわれわれ自身にとっても，重要なる意義を持つであろう[8]。それゆえわれわれは，このPérier の矛盾した叙述が意味するものに，深く留意せざるをえないのである。

ところでわれわれは，次に Non classé の諸タイトルおよびこれらの順序の決定にわれわれの歩を進めたい。このためには，断章草稿の分類綴 (liasses) に見られる一個の謎を解かねばならないが，差し当ってわれわれはこの謎の所在を明らかにするため，パスカルの ≪ordre≫ の精神とこの精神の表出たる数的分類用語の使用とについて，事前に触れておかねばならない。

IV ≪ordre≫の精神と分類

パスカルが卓越した物理学者および数学者であった以上，彼が ≪ordre≫ の

精神——≪ordre≫を尊重する精神——の持主であったことは，われわれの容易に想像しうるところである。今われわれが問題とする彼の著述にかんする事柄について顧るならば，次の二断章において，彼の≪ordre≫の精神を，われわれは如実に読み取りうるのである——≪著作するときに，最後に考えつくことは，何を最初におくべきかを知ることである≫(La.8—Br.19)，≪順序。私はこの論述を次のような順序で始めることも，あるいはできたであろう。すなわち，あらゆる境遇のむなしさを示すために，普通の生活のむなしさ，ついで懐疑論およびストア派の哲学的生活のむなしさを示すのである。しかし，この順序は守られないであろう。私は順序というものがどういうものであるか，そしてそれを理解している人がいかに少ないかということを，いささか心得ている。……≫(La.47—Br.61) また『パンセ』のポール・ロワイヤル版序文中には，次のごとき叙述が存する——氏〔パスカル〕は物事を表現するに当っては，事前に多大の考慮を払いかつ脳裏においてこれを整理し，所期の効果が得られるように，何を最初に置くべきか或は一番後に何をおくべきか，また全体をいかに配置すべきか，こうしたことについて熟慮を用い，周到なる検討を怠らないのが，氏の慣わしだったのである。」[9)]

かようにわれわれは，パスカルが彼の著作一般において≪順序≫ordre に意を用いていることを知るのであるが，≪アポロジー≫のプランにあっても同様であることは，上掲の引用断章がすべて『パンセ』中のものであること自体によって，明らかである。そうしてこの≪ordre≫の精神の具体化は，まず各リヤスが針と糸で綴られたものであるということによって示されている。すなわち，これは分類作業の結果であり，そして分類こそは ordre にとって不可欠の前提であり，分類なくして「順序」を設定することは不可能である。次にリヤス中には≪ordre≫なるタイトルを持った≪章≫ chapitre があり，また≪ordre≫という小見出しを附与された断章は10個に達する。さらにリヤス中の≪Commencement≫なるタイトルと≪Conclusion≫なるタイトルは，互に関連しつつ明らかに ordre を示している。

以上においてわれわれは，パスカルの≪アポロジー≫のプランが事実上≪ordre≫の精神によって支配されているのを理解しうるであろう。ところで

上述のごとく「分類」こそは ordre に欠くべからざる前提であり，したがってパスカルにあっては，分類意図を明示する数的分類用語は端的に ≪ordre≫ の精神の caractère である。われわれは次にパスカルの著作（数学的論文と物理学的論文およびその他若干のものを除く）[10]における数的分類用語の頻出度を調べ，≪アポロジー≫のプランが——パスカルの ≪ordre≫ の精神から観るとき，かつまた実際の作業上の必要性から見るとき彼の著作中でいかなる性格を帯びていたか，これを明らかにしたい。

V　数的分類用語の頻出度表

表　I

I　≪Pensées≫

A＝2(65)・3(3)　B＝2(3)・5・6・9・12・29

II　≪Provinciales≫(20)

A＝2(23)・3(5)・4　B＝3・7　数的分類のない文献＝8

III　≪Ecrits sur la grâce≫(4)

A＝2(49)・3(3)　B＝2(2)・3(4)・7　数的分類のない文献＝1

IV　≪Prière pour demander à Dieu le bon usage des maladies≫

A＝2・3　B＝15

V　≪De l'esprit géométriqne et de l'art de persuader≫

A＝2(12)・3(2)　B＝2(2)・3

VI　≪Les écrits des curés de Paris≫(5)

A＝2(5)　B＝0　数的分類のない文献＝2

VII　≪Ecrit sur la signature≫

A＝2・3(2)　B＝0

VIII　≪Sur la conversion du pécheur≫

A＝2(6)　B＝0

IX ≪Comparaison des chrétiens des premiers temps avec ceux d'aujourd'hui≫

A＝2(7)　B＝0

X　≪Entretien avec M. de Saci≫

A＝2(9)　B＝0

XI　≪Trois discours sur la condition des grands≫(3)

A＝2(5)　B＝0

XII　≪Lettres≫(32)

A＝2(52)・3(16)・4・5(3)　B＝0　数的分類のない文献＝21

調査文献(丸形のカッコ内は書簡数)——Lettre à M. et Mme Périer(6); Lettre à M. et Mme Périer ; Lettre à M. Périer ; Lettre dédicatoire à M. le Chancelier ; Lettre à la sérénissime Reine de Suède ; Lettres à Mlle de Roannez (9) ; Lettre au Père Noël ; Lettre à M. le Paillleur ; Lettres à M. de Ribeyre(2) ; Lettres au Père Lalouère(2) ; Lettre à Huyghens ; Lettres à Fermat(4) ; Lettre à la marquise de Sablé ; Fragment d'une lettre de Pascal〔1661〕

XIII　≪Testament≫

A＝2　B＝0

XIV　≪Abrégé de la vie de Jésus-Christ≫

A＝0　B＝354

XV　≪Mémorial≫

A＝0　B＝0

表　II

I　調査文献の総数……73個

II　数的分類のない文献の総数……32個

III　数的分類用語の見出される文献（41個）の全体における頻出度

A＝2(236)・3(32)・4(2)・5(3)〔計273回〕

B＝2(7)・3(6)・5・6・7(2)・9・12・15・29・354〔計22回〕

VI　表の解説と liasses の謎

まず表中の数字は概数であり，少な目に数えてあるが，Aは数的分類用語のうち数字以外の文字による表現であり，Bは数字によるものである。等符号の右辺の数字は分類項の数（分類された内容物の数）を表わし，カッコ内は頻出

回数を示す（カッコのないものは一回のみ出現のもの）。 したがって例えばA＝2(3) は，分類項数2のものが3回出現しており，これらがすべて数字以外の文字によって表わられていることを，意味する。実際の場合，分類項数の表現は種々の形態で現われている。分類項数2の場合を例に採れば，次のごとくである——≪l'un, l'autre≫ ; ≪premier, deuxième≫; ≪premièrement, deuxièmement≫; ≪premièrement, ensuite≫; etc.

なお文献のタイトルの次のカッコ内の数字は，このタイトルによって総括される文献の数を示している。例えば≪Provinciales≫(20)は，20個の文献をふくむことを，意味している。次に表IIにおける調査文献の総数(73)中数的分類のない文献が32個存するが，これは文献の種別に由来する数字で，文章の量を度外視したものである。例えば量の多大な≪Pensées≫も短い書簡も，とともに文献数1として表示されている。したがって文章の量を考慮に入れると，数的分類用語のない文献の量は，極めて僅少にすぎない。Ed. du Seuil(全集版)のページ数を規準にすると，上掲の73個の総数は約270p.であり，数的分類のないもの(32個）は約20p. にすぎない。さらに自然科学的論文(書簡の形式のものをも含む——約220p.)を合わせると，パスカルの全著作(約640p.) の大部分(約470p.)に数的分類用語が見出されるのである（但し各頁に分類用語が見出されるいう意味ではない。また150p. に相当するものは未調査である)。かようにパスカルの数的分類用語の使用の傾向には，歴然たるものが存し，これを蔽うことは出来ない。

扨て表Iにより，われわれは『パンセ』がパスカルの著作中一番多く数的分類用語に富んでおり（76回），かつ分類項数のヴァライアティにおいて最大である事実（7種）を知るのである。この事実は，決して偶然ではない。なぜなら，彼パスカルが≪ordre≫の精神を保持するかぎり，またその論述の内容が量的に，多大であったかぎり，それだけ多く彼には分類整理の必要があったからである。言いかえれば，≪アポロジー≫の下書きたる『パンセ』は数的分類用語の使用度が多大たるべき必然性を具えていたのである。しかしこの使用の必然性の傾向に反する事実が，『パンセ』の liasses には見られるのである。それは，27個に達する liasses の順序を指示する数的分類用語が一切見出されないという事実である。

かようにわれわれは，≪ordre≫の精神に矛盾した一つのdésordreを発見するのであるが，これこそはまさに一個の「謎」と言うべきものである。しかし果してこれは，真にdésordreであろうか。もし27個のリヤスに分類用語が附与せられたとすれば，表Ⅱにより，それは数字が用いられたであろうことが推測される(なぜなら分類項数6以上はすべて数字によって表現されているから)。しかし，なぜリヤスに番号が附けられていないのであろうか。われわれは直ぐ次の回答を思いつく——パスカルの記憶力がいかに弱まったとは言え，リヤスの順序は極めて重要である以上，27個のリヤスの順序はこれを脳裏に収めえたであろうと。この説明は一応合理的である。しかしわれわれは，≪アポロジー≫中の最重要部分に属する≪証拠≫（キリスト教の証拠を意味する）と題する一断章を見出すのである。これは La.459—Br.289（Ⅶ参照）であり，12個の番号を有するものである。したがってわれわれは，27個のリヤスの順序を記憶しうる者が，なぜ12個の順序を記憶に留めえず，これを番号で書き留めねばならなかったのか，という疑問を抱かざるをえないのである。記憶力による説明は，かくして矛盾に陥る。それゆえわれわれは，別個のより合理的なる説明を求めねばならないのである。

今仮りにリヤスのすべてに番号を附した場合を想定してみよう。この場合リヤスの順序の変化は，基本的に次の三つが容易に想像される——(一)既存のリヤスの位置の変更。(二)新しいリヤスの追加。(三)既存のリヤス中不要になった廃棄すべきリヤスの除去。この三個の場合のうち，手数の掛らないのは(二)の場合のうち最後のリヤスに新しいものを追加する場合と，(三)の場合のうち最後のリヤスを除去する場合のみである。この二つ以外の場合は，すべて番号を附け更えなければならないことは明瞭である。しかも叙上の基本的変化の場合において，順序の変更が僅少であるという保証はないのである。すなわち，われわれは「これ〔アポロジー〕を完結するには，健康状態の十年間を要すると，氏〔パスカル〕はしばしば語っていた……」[11]というポール・ロワイヤル版序文中の Périer の叙述を，忘れてはならないのである。したがって順序の変化が生ずる毎に番号を書き変えるとすれば，手数の煩雑さは甚だしいものに成らざるをえないのである。この手数を省くには，どうすればよいか。その方

法は簡単である。リヤスに番号を附与せず，暫定的順序に従って並列ないし積み重ねればよいのである。この方法によって上述の三つの場合の処置は，何度変更があろうとも極めて単純である。(二)の場合も新しいリヤスないし新しいタイトルの記入された紙片（所属断章の作成を後日に期した）を，適当な個処（既存リヤス中の）に挿入ないし附加すればよいのである。こうしてわれわれは，パスカルがリヤス作製の当時，リヤスの順序変更にまつわる手数の煩雑さに対する処置を，長期を見通して，既に考慮していた事実を発見するのである。すなわち外見上の désordre は，パスカルの ≪ordre≫ の精神の深慮ある発露であったのである。かくて順序変更が幾度起っても構わぬようにパスカルが配慮していた以上，かつまた彼の死の直前[12]までこの処置方法を変更する必要がありえなかった以上，われわれは写本に記されたリヤスの順序がパスカルの死の直前の状態（したがって生前最後のプラン）を反映している可能性——あくまでも可能性にすぎない——を持つと，推測しうるのである。したがってまたリヤスの順序を構成するリヤスの数そのもの及びリヤスの諸タイトルもまた死直前のプランを構成するものと言いうるのである（タイトルにかんする第四の証明)[13]。

ところで諸タイトルに書き替えがないのは死の直前まで変更の要がなかったためと言いうる。このことは，彼の数多くの断章の行文がしばしば抹消(rayer)されている事実に徴しても，確言しうるところである。しかも各リヤスのタイトルは極めて重要な性質を持つ以上，変更を必要とするにもかかわらず，これが放置されたとは到底考えられないのである（II参照)。

以上においてわれわれは，パスカルの≪アポロジー≫の下書きたる liasses のもつ謎の解明を通じて，従来われわれ自身の課題としたリヤスのタイトル・数・順序の証明を，すなわちこれらが Non classé にも通用しうることの証明を，一挙に果したのである。しかしリヤスの順序の問題は，完全に解決したのではない。したがってわれわれは，上述の文章のうちで「パスカルの死の直前の状態（したがって生前最後のプラン）を反映している可能性——あくまでも可能性にすぎない——を持つ」と記したのである。それゆえわれわれは，われわれ自身のこの言葉の意味するところを，更に追究せねばなければならないので

ある[14)]。

Ⅶ　前出の諸問題の解決

Ⅰ～Ⅲにおいて，われわれは三個の問題を未解決のままに残した。三つの問題とは，次のごとくである。(一)≪宗教の証拠≫にかんする三個の資料のうち，どれが一番最後のものであるか。(二)≪宗教の証拠≫についての第四，第五……番目以下の構想がありえなかったか。(三)パスカルは不適当な断章の部分または全体を抹消する（rayer）配慮を常に怠らなかったが，なぜ上掲の三個のうち――このうち一個がパスカルの意に適ったとして残され――他の二つが抹消されていないのか。

まず三個の資料とは，次の二断章およびリヤスの諸タイトル（Lafuma のいわゆる 18°～26°）である。

(1)　La.38—Br.290 (Non classé)

宗教の証拠。

道徳。教理。奇跡。預言。表徴。証拠。

(2)　La.459—Br.289 (Non classè)

1°かくも自然に反するのに，自力でかくも強固に，静かに確立したキリスト教の成立によって。

2°キリスト者の魂の聖潔，高尚，謙虚。

3°聖書の不思議。

4°特にイエス・キリスト。

5°特に使徒たち。

6°特にモーセと預言者たち。

7°ユダヤ民族。

8°もろもろの預言。

9°永続性。他のどの宗教にも永遠性がない。

10°すべてのことを説明する教義。

11°この律法の聖きこと。

12°世界の動きによって。

(3) Liasses の諸タイトル (Classé)

18°宗教の土台と反対論への回答。

19°表徴としての律法。

20ラビの教え。

21°永続性。

22°モーセの証拠。

23°イエス・キリストの証拠。

24°預言。

25°特別の表徴。

26°キリスト教の道徳。

第一の問題について——VIにおいて述べられたごとく，パスカルはリヤスを作製しはじめた当時[15]すでに，リヤスの順序およびリヤスのタイトルの変更にかんしては，長期の対策を考案していたのである。それゆえもしリヤスの諸タイトルを変更し，前記の二断章のいずれかに≪宗教の証拠≫にかんするタイトルを決定したとするならば，この対策に従って処置が採られたはずである。例えば La.38 の順序およびタイトルに変えるならば，これに応じて liasses 中の26°を最初の部分に移動し，19°を24°と25°の間に挿入すればよい。≪教理≫と≪奇跡≫については，liasses のタイトル中不適当なものを rayer して≪教理≫および≪奇跡≫に書き直せばよいのである。もし不適当な liasses があれば，この liasses を廃棄すれば，事は足りるのである。こうした処置は極めて簡単であり，少くとも≪道徳≫・≪預言≫・≪表徴≫の三つは，殊更書く必要はなかったのである。爾後リストの変化に伴う書き替えの手数（幾度となく起りうる）の煩雑さを予想するなら，なおさらのことである。それにもかかわらず，こうした処置が採られなかったのは，La.38 が liasses の諸タイトルより前に書かれたからである。同様のことは，La. 459 についても言いうるのである。したがってこの二個の断章（La.38, La.459）は，liasses の諸タイトル決定以前のものであると，結論しうるのである。

第二の問題——≪宗教の証拠≫にかんする第四，第五……番目のリストがありえたのではないか，という疑問に対しても，われわれは叙上の処理方法が妥

当すると考えるから，かかるものは在り得なかったと，推定しうるのである。以上を通じて，われわれは liasses のタイトルに変更はありえなかったことを論定しうるが，これらタイトルの順序そのものにかんしては，パスカルの死直前において彼の意図していたものと真実同じであるか否か，今のところいずれとも断定し難い。したがってわれわれは，この事にかんし次回において十分なる検討を要するであろう。

最後に第三の問題にかんして——われわれはこれに答える義務を持つ。前記二断章が何故抹消されていないのか——これに対する回答は，「それは抹消も除去もこれを行う必要がなかったからである」と，われわれは言いうる。なぜなら，針と糸を使って綴られたリヤスに書かれた諸タイトルと，前述の二個の断章（二個の紙葉）とは，その物理的状態の差異において一目瞭然たるものがあるからである。しかも両断章には≪証拠≫なる小見出しが附されており，本格的執筆に際して，リヤスのタイトルと後二者とを混同する虞れは毫も存しない以上，パスカルにとっては，抹消も除去も不要であった事実を，われわれは知るのである。

以上第三の問題にかんしては，われわれは三個の≪宗教の証拠≫のうち一個のみがパスカルにとって必要であり，他の二個は不要であって廃棄さるべきものという仮定に立って論証を行ったのであるが，最後に次のことをも附記しておきたい。すなわち，この仮定は必要ではあるが，実際は必ずしも必然的ではないということである。なぜなら，パスカルにとって一個のみが差し当って暫定的に必要ではあっても，他の二個にも捨て難いものがあり，彼自身将来利用の可能性を予想していたかも知れないからである。

ともあれ以上全体を通じて，われわれは，次回に扱うべきものを除いて，前出の諸問題についてはすべてこれを解決し得たのである。

〈注〉

1） Lafuma, Recherches Pascaliennes, Paris, Ed. Delmas, 1949, p. 65—66. この個処において，彼は次のごとく述べている —— 〈Trois séries : III, IV, V ont

complètement disparu en tant qu'originaux et il est à remarquer qu'elles retiennent des textes rédigés en 1661—1662.〉（因みに La. 642—Br. 783 は Série IV にぞくする）

2）「抹消」は語句文章のすべてに汎って見られるが，われわれは単語一つの抹消を数え挙げず，2個以上のものを抹消と認めて表に掲げた。単語一個の抹消も考慮に入れれば，抹消断章の数が増加することは言うまでもない。

3）Lafuma, op. cit., p. 56. 彼の旧い論拠は，パスカルがリヤスの目録をなんら残さなかった，という点にある。

4）「二度繰り返えして」とは，『第一写本』の冒頭の titres のリストと，liasses の末尾（同写本 189 頁）に筆写されたリストとの二個を，指している。因みに『第二写本』中にも同じ内容のリストが存する。

5）リヤスを筆写したものの中にはこのタイトルのみが写され，このタイトルに相応しい内容そのもの（断章）はリヤス中には見当らないものがある，という意味である。

6）Lafuma, Histoire des Pensées de Pascal, Paris, Ed. du Luxembourg, 1954, p. 85—86.

7）Pascal, OEuvres complètes (Ed. du Seuil), Paris, 1963, p. 498.

8）われわれはこの問題を，次回において Barnes 夫人の所論を検討する際に，取扱う予定である。

9）OEuvres complètes, op. cit., p. 495.

10）数学的論文および物理学的論，その他若干のものを除いたのは，これらの論文の性格上数的分類用語の使用例が多く見られても当然だからである。なお数的分類用語の頻出度の検出に当って，テキスト（全集版）は Ed. Chevalier, Paris, 1954 および既出の Lafuma による Ed. du Seuil を使用参照した。

11）Pensées, Editions du Luxembourg, Paris, 1951, t. III (Document), p. 139.

12）「死の直前」とは，もちろん厳密な医学的意味で言われているのではない。彼が草稿を書きうる状態にあって，しかもその死の時点に一番近い時期という意味である。

13）Non classé のタイトルにかんする証明については，第一より第四にいたる証明によってこれを果しえたものと，われわれは信ずる。

14）この追究は次回において行われる予定である。

15）Lafuma によれば，パスカルがリヤスの作製すなわち断章群の分類を始めたのは，1658年中である——Voir Lafuma, Controverses Pascaliennes, Paris, 1952, p. 85—86.（注了）